

ロシア統治下における クルグズ首領層の権威について

——遊牧世界とイスラーム世界の間で——

秋 山 徹

序 論

1 「バートウル（勇士）」としてのシャブダグ

- (1) 「戦の時代」における首領の条件
- (2) 征服・併呑過程におけるバルムタ
- (3) ロシア統治の進展とバートウル

2 イスラーム世界の中のシャブダグ

- (1) 「戦の時代」のイスラーム
- (2) イスラームによる権威付け

結 論

序 論

15世紀中期から16世紀にかけての中央ユーラシアにおいて、様々な遊牧勢力が拡大していったことはよく知られている。こうした中、ウズベクやオイラト、カザフと並んで天山山脈西北部に姿を現わすのがクルグズ（キルギス）である〔堀川1999: 153〕。前三者については今日に至るまで研究が積み重ねられ、その実像がより明らかにされてきたのに対し、クルグズについては依然として未解明の部分が多い。

とはいえ、中央ユーラシア近世・近代史をめぐる先行研究から、当該時期におけるクルグズについて一定の傾向を指摘することも可能であろう〔Ploskikh 1977; 小松 1986; 小沼 2001; 新免 2001; 澤田 1995, 2005など〕。第一に、社会構造上の特質として、クルグズにはチンギス裔に連なる統治者が存在せず、前三者

のような統一的な政権や国家を形成しなかった。すなわち、相互に独立性の高い首領——時代や地域によってその称号も多様であった——が群雄割拠していた。第二に、クルグズの首領たちは軍事力を背景に周囲に脅威を与えたばかりでなく、それを媒介として周辺の諸勢力——例えば、モグーリスタン、コーカンド・ハン国、ヤークトプ・ベグ政権など——と関係を構築していた。第三に、宗教的な側面において、クルグズは中央ユーラシアの諸勢力の中でもイスラーム化するのが最も遅かった。さらに、彼らはイスラームを受容しつつも、シャーマニズムやアニミズムの要素を色濃く残していたのである。

それでは、このような特徴を有していた前近代のクルグズ社会は、19世紀中期から20世紀初頭にかけてロシア帝国によってどのように併呑され、その支配に包摂されたのであろうか。またロシア統治の下でどのように変容したのであろうか。このことについて、筆者はこれまで、「マナプ (manap)」と呼ばれた首領層に焦点を当てながら考察を行ってきた〔秋山2009, 2010, 2011〕。なお、マナプとは19世紀中期以降、天山山脈西北部のセミレチエ（ジェティ・スウ）一帯を遊牧するクルグズ諸部族の首領の称号として定着したものである。

さて、先行研究においても指摘されてきたように、近代における中央ユーラシアの遊牧社会の変容は、属人主義から属地主義への移行として理解することができる〔堀 1992: 163-164; 同1995: 307-308〕。すなわち、露清両帝国の膨張によって周縁化する中央ユーラシアにおいて、カザフやクルグズなど遊牧民の社会編成の原理は部族的なものから、領域的な側面へと移行したのである。実際、こうした属人主義から属地主義への移行は、クルグズとロシア帝国との関係にも認めることができる。カザフ草原を併呑したロシア帝国は19世紀中期以降、コーカンド・ハン国の征服を目指して軍事膨張を活発化させるが、その途上、カザフ草原とフェルガナ盆地の間に横たわる天山山脈においてクルグズと密接な関係を持つようになった。この中でロシア帝国は、前述の首領層マナプたちの間にヒエラルヒーを構築し、彼らが発揮する機動力を征服活動に利用した。同時にロシアはコーカンド・ハン国の北辺を取り巻く要塞線に沿う形でマナプたちの勢力圏を領域的に再編していった。こうした属地主義的な傾向は、1867年にトルキスタン総督府が創設されて直轄統治体制が敷かれることでより明白

になった。すなわち、従来のようにマナプとそれが率いる部族（*rod*）を単位とした統治体制に代わって、総督府以下、州、郡の下に設置された郷（*volost'*）に編成されていった。その中で在来の勢力であったマナプに代わり、選挙で選ばれる郷長（*volostnoi upravitel'*）、つまり植民地統治機構末端の現地民官吏による統治制度が敷かれたのである。

ただしクルグズ社会においては、こうした属地主義による統治体制が整えられてゆく一方で、依然として属人主義的な側面が機能していた点にも留意しなければならない。こうした、いわば「属地主義のなかの属人主義」を象徴する存在として筆者が着目してきたのが、セミレチエに拠点を置くサルバグシ族のマナプ、シャブダン・ジャンタイ Shabdan Jantay uulu (1840-1912) である。シャブダンはロシア統治の成立と展開に深く関わった人物であった。彼の没後、植民地官報『セミレチエ州公報』に掲載された訃報記事（ロシア語）は以下のように記している。

ロシア行政府にとってシャブダンは真に献身的で忠実な原住民の模範であり、〔セミレチエ〕州の枠をはるかに超えて民衆への大きな影響力を有していた [Mestnye... 1912]。

実際、彼はロシア帝国の征服活動に協力し、1882年には陸軍中佐（*voiskovoi starshina*）という高い軍階を与えられた。彼はまた、19世紀末のロシア人植民地軍政官として「郡長補佐のような役割を果たしている」と言わしめたように [TsGA RK.f.44.op.1.d.695.l.6ob.]、郷制度の枠に収まらない、ロシア統治の特別な仲介者でもあった。

このようにシャブダンが陸軍中佐という、いわばロシア帝国の軍事膨張の副産物としての一面を有していたことは確かであろう。しかし同時に、ロシア帝国とクルグズ社会の仲介者として機能するためには、クルグズ社会との関係においても何らかの権威を有していたはずである。この問題について、現地クルグズ共和国の研究者たちが明確な解答を出しているとは言い難い。というのも、彼らはシャブダンを民族の偉人として素朴に顕彰することにのみ終始しており [Ömürbekov 2003]、クルグズ社会における彼の権威のあり方やその意義に関する学術的な研究は無きに等しいからである。むろんシャブダンはあくまでクル

グズの一首領に過ぎず、彼のみを以てクルグズ社会を代弁させることはできない。とはいえ、シャブダンには彼の名を冠した史料集が刊行されている〔Shabdan... 1999〕ことから窺えるように、クルグズ近代史上において顕著な活動を示した人物であり、先に述べたようにロシア統治の成立と展開において、きわめて重要な役割を果たした人物でもある。したがって、このシャブダンを媒介として、現地社会におけるその位置づけを探ることをとおして、当時ロシア帝国と不可分の関係にありつつも、なお遊牧的性格を色濃く持ち続けていたクルグズ社会の特質の一端を抽出することは可能であろう。

以上のような問題関心から、本稿はロシア統治下におけるクルグズ首領層の権威の様態を、シャブダンというマナブを軸として明らかにすることを目的とする。さて、シャブダンの権威について考察する上でまず想起されるのは、「マナブ」という称号である。ここで湧くのは、果たしてこのマナブという称号それ自体が権威を持つものだったのだろうか、という疑問である。筆者が指摘したように、現地で勤務するロシア軍人や行政官たちは、クルグズと接触してゆく中で、マナブをカザフのスルタンに類するクルグズ独自の貴族層（「白い骨」）として認識していった。その一方で、ロシア当局は直轄統治を進展させてゆく過程でマナブを統治の障害として位置づけ、これを排除する「闘争（*bor'ba s manapami*）」の対象とするようになった〔秋山 2011〕。シャブダンもこうした動きと無関係ではあり得なかった。先に引用した訃報記事において、ロシア当局はシャブダンを「献身的で忠実な原住民の模範」とする一方、以下のように評している。

原住民のキルギズ [=クルグズ] にとって〔シャブダンは〕典型的な族長マナブであり、ロシア人の目から見てもマナブとしての欠点と無関係ではなかった〔Mestnye... 1912〕。

実際、ロシア当局は19世紀末以降、シャブダンが民衆に対して行なう徴発・徴税行為を問題視するようになり、彼を「対マナブ闘争」の対象とみなすようになっていた。

さらに、マナブに対するこうした否定的な評価がひとりロシア当局だけにとどまらず、クルグズ社会においてもなされていた点を指摘せねばならない。例

えば、1920年代初頭にソ連政権によって実施された民族学調査によれば、クルグズ民衆はロシア統治下のマナプについて、「権力欲、無慈悲、手前勝手、民衆の搾取、派閥抗争、個人的な利益への志向」といった否定的な評価を下していたという [Gavrilov 1927: 209]。加えて、シャブダンその人もマナプに対して消極的な評価を抱いていたことが注目される。このことについて、息子のカマル・シャブダノフ Kamal Shabdanov (1882-1948) は、「マナプ制 (manaptik) は私とともに消えてゆくだろうと父 [シャブダン] は言ったものである」と回想している [Kamal 1947: 21-22]。以上のことから、マナプは支配層としての弱さを抱えた存在であったことが明らかであり、よってマナプという称号それ自体が権威を持つものであったとみなすことはできないのである。

こうした点を踏まえた上で、本稿はシャブダンの権威をまず中央ユーラシア遊牧世界との関係性において検証する (第一章)。松原正毅は、遊牧社会における政治支配者のあるべき姿として、勇敢さと公平な裁き、ならびに公平な分配を指摘しているが [松原 1991: 432]、本稿では首領に求められた勇敢さの資質に着目してみたい。特にこうした勇敢さを示す指標として注目したいのが、「バートウル (baatır, 勇士, バハードウル, バガトル)」という称号である。よく知られるように、バートウルという称号は匈奴の首長「冒頓 (はくとつ)」とも関係があるとされ [林 2009: 62]、中央ユーラシア遊牧世界に古くから存在する称号である。村上正二も指摘するように、それは戦場において偉大な英雄的武勲を樹てた人々が遊牧英雄としての威厳を示すために用いた外的標識であった [村上 1993: 154]。ところで、クルグズの英雄叙事詩『マナス』の中でも示されているように、バートウルがクルグズ遊牧社会においても重要な地位を占めていたことは言うまでもない。しかし従来、バートウルは英雄叙事詩研究の中で言及されるにとどまり [Prior 2002]、歴史学との接点は追求されてはこなかった。言い換えれば、実在した首領の称号としてバートウルが検討されたことはなかったのである。次いで、遊牧世界における位置づけを踏まえた上で、シャブダンの権威をイスラーム世界との関わりにおいて検討する (第二章)。18世紀以降、中央ユーラシアの政治権力が支配の正統性を示す上でイスラームが重要なファクターになりつつあったことを勘案すれば [小松 2012: 25]、クルグ

ズの首領たちも、そうした潮流と無縁ではありえなかったと考えられるからである。

史料としては、まず、クルグズ人にしてはじめて自民族の歴史を描いたオスマンアリー・スウドウコフ ‘Uthmān ‘Alī Sīdīkov (1875-1940) による『シャドマーンに捧げしクルグズの歴史 (Ta’rīkh-i qīrghīz-i shādmāniya)』(1914年、ウファ)や、シャブダンの息子である前出のカマルが著わした『我が父シャブダン・バートウルの生涯 (Atabiz Shabdan baatir tuurali jazilgan tarikh)』(1947年、未刊行)を中心として、クルグズ自身が書き残した史料を利用する。これらの他に、ロシア帝国の植民地当局の公文書、ならびに同時代に発行されていた定期刊行物を用いる。なお、定期刊行物には植民地当局によって発行されていた新聞だけでなく、タタール語雑誌『シューラー (Shūrā)』が含まれることを付記しておきたい。とくに本稿では、Sh.V. なる人物が1911年に同誌に寄稿した「クルグズについて (Qirgizlar tūgrūsinda)」と題する論説を利用する(以下これは「クルグズについて」と略す)。この人物の来歴や素性は必ずしも明らかではないものの、それは現地のクルグズたちの実見に基づいて書かれており、20世紀初頭のクルグズ社会にまつわる大変ユニークな史料であると言える。にもかかわらず、この論説が研究に利用されたことは管見の限りではない。

引用史料中における […] は中略、[] は筆者による補足を意味する。また、史料原文を引用する際は、ローマ字で転写して表記する。転写方法は、小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る事典』(平凡社、2005年)付録の翻字表(592-593頁)にしたがう。その際、テュルク系諸語はローマン体、ロシア語はイタリック体で表記する。

1 「バートウル」(勇士)としてのシャブダン

本章では、前述のシャブダンの權威を、中央ユーラシアの遊牧世界の価値観との関係において検討する。「序論」の中でも指摘したように、ロシア語で執筆された同時代史料において、シャブダンは「マナプ」や「陸軍中佐」という称号を伴い、「シャブダン・ジャンタエフ (Shabdan Zhantaev)」とロシア語の

人名表記法にしたがって表記された。他方、アラビア文字で表記された同時代のテュルク語史料においては、シャブダンは「バートウル」の称号を伴って表記された。このことを如実に示す史料として、セミレチエ州庁によって発行されていた新聞『セミレチエ州公報』の記事に着目してみよう。同公報にはアラビア文字テュルク語による「現地語部 (*tuzemnyi otdel*)」が存在したが、1912年4月10日号の現地語部に掲載されたシャブダンの訃報記事のタイトルは、

Shābdān bāṭīr Jānṭāy ūghlīnīng ōpātī

(ジャンタイの息子シャブダン・バートウルの逝去)

と記された [Shābdān... 1912]。このように、シャブダンの名前に「バートウル」の称号を付した記述は、同紙4月29日号に掲載された追悼記事 [Vāyskāvōy... 1912] の他にも、サブル・ガブドゥルマーン Ṣābir ‘Abd al-Mannuf というタタール人が『シュエラー』誌に寄稿したシャブダンの追悼供養に関する記事の中にも認められる [‘Abd al-Mannuf 1913 (No.2) : 62]。なお、このタイトルにはロシア語訳が括弧付きで補足されており、それには以下のように記されていたことも付記しておきたい。

O smerti Voiskovoi Starshina Shabdana Zhantaeva

(陸軍中佐シャブダン・ジャンタエフの逝去) [Shābdān... 1912]

これらの史料は、シャブダンが当時のクルグズ人ならびにカザフ人現地社会において「バートウル」と目されていた、あるいは少なくともバートウルと称されていたことを窺わせる。それでは、彼はどのようにしてバートウルとして認められていったのであろうか。このことについて、ロシア統治開始以前の19世紀中期にまでさかのぼって検討しよう。

(1) 「戦の時代」における首領の条件

「我々はかつて戦士になることを学んだ民族である」。20世紀初頭にクルグ

ズの民族史を著わしたオスマンアリー・スウドウコフは、彼ら自身をこのように評している [‘Uthmān ‘Alī 1914: 59]。実際、クルグズがロシア帝国に併合される19世紀中期以前の時期を、クルグズ語で「戦^{いくさ}の時代 (jookerchilik zaman)」と呼ぶことがある [Talip Moldo 1993: 525]。この時代に関して前記の論説「クルグズについて」は以下のように述べている。

クルグズの古老たちの言うことによれば、30から40年来、クルグズは比較的平穏に暮らし、平和である。それまでクルグズたちに平穏な生活はなく、女や子供たちと家で一緒にいることはできなかった。マナブは民を羊同様に駆り立てた。ある時はカルマク [= ジューンガル] と、またある時はカザク [= カザフ] と、そしてクルグズ同士でも戦った。勝った者は負けた側のあらゆる財産を奪い、彼らの妻子を捕虜として連れ帰った。程なくして、負けた側がやってきて報復した。こうして常時「戦」となっていた。民に平穏な暮らしが定着することはなかった。この「戦」で英雄らしさを示し、民を駆り立てていった者には「パートゥル」の名が与えられた [Sh. V. 1911: 104]。

上の史料に端的に示されているように、「戦の時代」においては、クルグズは周辺諸勢力との緊張関係にあったばかりでなく、クルグズ社会内部でも抗争が常態化していた。この中で、パートゥルという称号が、代々世襲されるものではなく、あくまでも武勲や個人的な資質によって獲得されるものであったことが注目される。ここで、こうした資質、すなわち勇敢さを示す上でとりわけ重要だったのが「バルムタ (barımta)」であったことを指摘したい。バルムタとは、クルグズならびにカザフ遊牧社会において実行された復讐行為である⁽¹⁾。このバルムタについて、シャブダン¹は、1885年にセミレチエ州庁勤務の軍政官アーリストフ N. Aristov に口述した「自伝 (avtobiografiya)」の中で、以下のよ

(1) バルムタは慣習法によって認められた合法的な復讐行為であり、強盗や家畜泥棒とは明確に区別されていた。ロシア人はバルムタを「バランタ (baranta)」と呼んだ [Martin 2001: 140-155]。

うに回想している。

クルグズとカザクの重要な関心事は襲撃と掠奪であった。名声を得るためには、有力者や富者であってもそれを行った。クルグズの中で名を成すために、私は襲撃に参加するようになった。初めのころは失敗も多かったが、私はあきらめなかった。しまいには私は、トゥナイ族——私を襲撃の指導者として選ぶようになった——の中だけでなく、クルグズやカザクの他の部族の間でも影響力を持つようになった [Aristov 2001: 512]。

シャブダンのいう「襲撃と掠奪」とはつまりバルムタのことであり、ここから、クルグズの首領にとってバルムタの遂行とその成功は、己の権威を高める上で非常に重要だったことがわかる。つまり、クルグズの首領の権威付けにとってもっとも重要なことは勇敢さを示すことであり、「パートウル」という称号はその勇敢さの証として付されるものであった。このことと関連して、20世紀初頭にクルグズ内部で聞き取り調査を行なった植民地官吏ソコロフ A. Sokolov は、彼に対して古老 (kari) たちが、「戦の時代」の記憶として、「[マナプに複数の息子がいる場合] そのうち勇敢 (voinstvennyi) で統治に適格な息子がマナプの称号を得た」と語ったという記録を残している [Sokolov 1910: №55]。また、1860年代初頭にクルグズ社会を観察したロシア軍人ヴェニユコフ M. Venyukov は、「マナプがパートウルである場合、首領は大きな権力を持った」ことを指摘している [Venyukov 1861: 108]。これらから、次のことを指摘できるだろう。すなわち、「戦の時代」においては、クルグズの首領が首領たりえる条件は「勇敢さ」を備えていることであり、それはバルムタの遂行と成功によって支えられていた。彼らの権威は勇敢であることという個人的な資質に依拠したものであり、そのような資質を示す指標こそが「パートウル」という称号だったのである。

ここで、パートウル、つまり傑出した首領が、クルグズの社会編成に大きな影響を与えていたことを付言しておきたい。古老たちは前出のソコロフに対して、「己の資質によって周囲から傑出したパートウルの周りには、親兵 (イギ

ット) がいて、バートゥルは彼らとともにバルムタを行ない、同胞を守ることによって名声を得た」と語ったという [Sokolov 1910: №55]。このように、クルグズ社会においては、バートゥルを中核とするとするイギット(親兵)部隊——英雄叙事詩『マナス』におけるマナス・バートゥルと40親衛隊士の姿を彷彿とさせる⁽²⁾——が社会の原動力となっていたのである。

(2) 征服・併呑過程におけるバルムタ

ところが、クルグズがロシア帝国に包摂されていく過程で、首領の権威の源泉とも言えるバルムタは刑事犯罪として位置づけられ、禁止されてゆく趨勢にあった。このことについて、前出の「自伝」の中でシャブダン以下のように述べている。

私は40名のイギットを率いて [...] テクス谷のクルジャ寄りに住むカルムイクを襲撃した。襲撃は成功し、我々は多くの馬を奪ったが、もはやそのような時代ではなかった。コルパコフスキー [= 初代セミレチエ州軍務知事] の指示に従い、我々は奪い取った家畜をカルムイクに返さねばならなかった [Aristov 2001: 513]。

これはただの一事例に過ぎないものの、ロシア統治の開始をめぐるバートゥルたちの懸案が、何よりもバルムタの可否にあったことは想像に難くない。それでは、こうした状況にシャブダンはどのように対応したのであろうか。

このことについて検討する前に、シャブダンと同じサルバグシ族に属するテミル支系のマナプ、トレゲルディ・アバユルダ Törögeldi Abayïlda uulu (1798-1868) の動向について触れておきたい。前述オスマンアリーが、「トレゲルディが示した勇敢さ (bāṭırılıq) の数々は人間業を超えていた」と述べているように [‘Uthmān ‘Alī 1914: 44], トレゲルディはバルムタの名手として名声を博したバートゥルであった。また、1850年代にクルグズのもとで調査を行なっ

(2) 英雄叙事詩『マナス』については、若松 [2001, 2003, 2005] を参照した。

た地理学者セミョーノフ Semenov P.P. がトレゲルディの「冒険心と勇敢さ」について特筆していることから窺えるように [Semenov 1958: 185], その名声はロシア人にも知られていた。しかし, ロシア統治がクルグズのもとに直接及ぶことによってバルムタが抑止されるようになると, トレゲルディはロシア当局に対して不満を抱いた。1867年トルキスタン総督府が創設され, ロシア帝国の直轄統治が開始された翌年, クルグズの統治に当たっていた初代トクマク郡長ザグリヤジスキー G. Zagryazhskii は, トレゲルディについて次のように記している。

ロシア権力はバルムタを抑止した。バルムタこそトレゲルディの富と影響力の源であった。それゆえ彼は我々に従わず, すぐさま反感を懷いた [TsGA RK.f.44.op.1.d.28959.1.517ob.-518.]。

さらに, 20世紀初頭に, 自らの手で収集した民族誌資料に基づいて歴史書『赤色クルグズ史 (Kizil kirgiz tarikhii)』を執筆したベレク Belek Soltonkeldi uulu によれば, トレゲルディは「私はロシアによって滅ぼされたのだと言って, […] 外に出ることもなく [1868年に] 亡くなった」という [Soltonoev 1993: 93]。トレゲルディの事例が示すように, バートウルにとってバルムタの禁止は, 死活問題であったと言えよう。

さて, このようにして, ロシアによるバルムタの抑止策を, トレゲルディがいわば真正面から受けとめて破滅していったのに対し, シャブダンは柔軟かつ巧妙に対応していた。一例を挙げよう。放牧地をめぐるカザフとの抗争におけるシャブダンの行動について, 前述のトクマク郡長ザグリヤジスキーは, 「シャブダンはすでにロシアの規律に精通しており, 同族人をバルムタに差し向けてカザフを粉碎するべく雄叫びを発するかわりに, 自らを殴打されるに任せ, ロシア法が味方であることを知っていたから, 誰にも助けを求めなかった」と指摘している [TsGA RK.f.44.op.1.d.31764.1.1-1ob.]。

このように, バルムタを注意深く回避する一方で, シャブダンはロシアの征服活動には積極的に協力した。例えば1868年には, ロシア統治に不満を抱いて

反乱を起こした同じクルグズのマナプ、オスマン・タイリヤクの追捕をおこない、また1876年には、ロシアのコーカンド・ハン国征服事業の一環であるフェルガナ征服作戦に加わっている。このフェルガナ征服作戦の際、シャブダンは、「私はバルムタをしにやってきたのではなく、奉仕にやってきた」と語って司令官スコベレフの部隊に合流したと伝えられている[Shabdan... 1999: 54]。ただし、こうした事例の表面のみを以て、シャブダンがバルムタを完全に放棄したとみなすのは早計であろう。何となれば、上述のロシアへの「軍事奉仕 (*voennye uslugi*)」の内実は、バルムタ同然だったからである。シャブダンは、彼が不断におこなってきた首領としての戦闘行為を、バルムタからロシアへの「軍事奉仕」へと言い換えたにすぎない。事実、前出の「自伝」の中でシャブダンが、「イギットたちの加勢がなければ、コーカンド地方の征服は不可能であった」といみじくも述べているように[Aristov 2001: 514]、1870年代後半に至るまで、シャブダンは従来同様にイギットを率いてロシア帝国の軍事遠征に参加している。つまりシャブダンは、ロシア帝国公認のもと、「軍事奉仕」を大義名分として「バルムタ」を行なっていたとすることができであろう。

以上のことから、シャブダンはロシア帝国ならびにクルグズ双方にとって受容が可能な形で軍事指導者としての役割を果たしたと言えよう。そして、このことによって、彼はロシア帝国から陸軍中佐の階級を与えられると同時に、クルグズ社会においてはイギットを率いるバートゥルとしての体面を維持したのである。それでは、ロシア帝国の軍事征服が完了する1880年代以降、シャブダンをはじめとするバートゥルたちはいかなる動きを示したのであるだろうか。次節では、このことについて検討しよう。

(3) ロシア統治の進展とバートゥル

ロシア帝国による軍事征服が完了したことは、クルグズにとって「戦の時代」が完全に終わりを告げたことを意味していた。当然のことながら、シャブダンをはじめとするマナプたちも軍事指導者としての活動に従事することはなくなり、バルムタの遂行者としての役割を喪失していった。ロシア統治が進展する中で、軍事指導者としての役割を喪失したマナプたちは、郷制度の中に搦

めとられていった。このことについて、「クルグズについて」は以下のように描写している。

マナブの地位は代々継承されている。マナブは自分が老いはじめると、より賢い子供を自らの代わりに民を統べる者として残そうとする。マナブは自分が生きているうちに、狼が子供に獣性（zverlik⁽³⁾）を教えるように、いかにして民から奪うか、派閥〔抗争〕（pārtiyalar）が生じた際にいかにして自分に従わせるか、郷が争った際にいかにして反対者たちを抑えるか——こういった全てのことについて子供に教える。若きマナブ（yāsh manāp）が民からうまく奪ったならば、クルグズたちは「善き父の子はうまく育った」[と言い]、より穏やかになって、民を怖れさせることができれば「善き父から悪い子が生まれた」と言う [Sh.V. 1911: 102]。

この記事からは、ロシア統治下のマナブたちが、これまで検討してきた「戦の時代」とは違った相貌を呈するようになったことが浮かび上がる。すなわち、彼らの関心の焦点は、バルムタの遂行によって勇敢さを示し、バートゥルの称号を獲得することではなく、派閥抗争に勝利して郷の権力を掌握することに移っていた。また、これと並行する形で、かつて外敵からの保護の対象であった民衆は、徴発の対象となっていたのである。マナブによる徴発行為の事例は枚挙にいとまがない。「クルグズについて」は続けて、「マナブは己に従う民衆から租税を徴集する。この租税は少なくとも羊1頭である。徴税は年に何度かあるため、誰であれ全ての世帯はマナブに30ソムの税を納める」と指摘している [Sh.V. 1911: 102]。マナブたちが民衆からの徴発に邁進した背景には、彼らの生存基盤の変化を想定することができる。すなわち「戦の時代」においては、マナブはバルムタによる家畜の獲得と、外敵からの保護の対価として民衆から集めた、「自発的供出というかたちで行なわれた食糧徴発」によって首領とし

(3) 「獣、野獣」を意味するロシア語“zver”に由来するものとしてこのように解釈した。

て存在していた [Valikhanov 1985: 38]。しかし、ロシアの統治機構の導入と整備にともなって、彼らはかつての収入源を喪失することになったのである。

他方、マナプの中には、民衆からの徴発だけに頼るのではなく、経営の再建に取り組む者もいた。その典型的な事例がソルト族のマナプ、ウズベク・ブシユコイ Üzbek Büshköy uulu (?-1912) である。ウズベクは、郡都ピシュベク市の南に隣接するトルカン郷を本拠地として家畜商を営むとともに、皮革加工場を経営した。ウズベクの経営が繁盛していたことは、1896年にピシュベク郡長タリジン A. Talyzin がセミレチエ州軍務知事に提出した、「ピシュベク郡のマナプ家系のキルギズの名簿」から窺い知ることができる。それによれば、ウズベクの一族は駱駝80頭、馬1,350頭、牛153頭、羊6,700頭ならびに現金15,000ルーブルを有していた [TsGA RK.f.44.op.1.d.6613.1.92ob.-93] という。このように、ウズベクは、貨幣経済とも関わりつつ、いわば実業家としての側面を強く有していたことが明らかである。こうした動向について、20世紀初頭にウズベクを間近に観察した植民地官吏シュカプスキー O. Shkapskii は、次のように指摘している。

過酷な戦の生活を送り、[…] 僅かなもので満足したかつての「パートウル」は現在では——仮にこう言い表すことが可能であれば——「ブルジョワ化」し始めた。マナプは「剣」を用いて「全てを奪う」ことができた。しかし今や剣は鞘のなかで錆びる運命にある。剣に代わってその座についたのは「金」である。金で「全てを買う」ことができる。マナプたちはこうしたことを見事に理解したのである。儲け志向がマナプたちの新たな標語となった [Shkapskii 1907: 44]。

こうした経済的利潤に比重を移すような動向は、ウズベクだけに限られたものではなかった。「パートウル」として名声を博したシャブダンもまた、実業家への途を模索していた。後年、息子のカマルが、「[シャブダンは] 息子たちに対して、何かの職業に就くよう助言した」 [Kamal 1947: 21-22] と回想するように、とりわけ息子たちの生業の確保に熱心に取り組んでいた。実際に、

民族学者アブラムゾン S.M.Abramzon が1920年代初頭に行なった現地調査では、シャブダンの息子たちが様々な事業に従事していたことが伝えられる。長男ヒサメトディンは100ヘクタールにもものぼる広大な敷地で農業経営を行ない、主に家畜の餌となるウマゴヤシを栽培して市場に出荷した。次男のモクシュは馬匹飼育業に着手した。三男のカマルは養蜂を行ない、一時は約11トンの蜂蜜をタシュケントに送り出した。また、四男のアマンは皮革加工業を営んだ [Abramzon 1931: 45] という。このように、シャブダンはロシア統治下の「平和な時代」状況を見据えつつ、息子達をバートゥルとしてではなく、実業家として育成しようとしたのであり、それは実現されることとなった。

もちろん、こうして実業家への転身に成功したバートゥルがいた一方で、没落を余儀なくされたバートゥルもいた。それを象徴する事例として、ウズベクの遠縁に当たるバイティク・カナイ Baytik Kanay uulu (1817-1886) とその一族について触れておきたい。バイティクは、1860年代初頭に当時コーカンド・ハン国の要塞であったピシュベクの長官を殺害するなど、勇敢なバートゥルとして知られていた。しかし、ロシア帝国の直轄統治の下でその力は確実に衰えていった。特に1886年のバイティクの没後、ジュト（冬害）も手伝って家畜の多くを失うと、その傾向は顕著となった。没落の一途をたどるバイティク一族が選んだのは定住化への途であった。彼らは、当時ピシュベク郡当局が進めていた定住化政策に呼応しつつ、父バイティクの時代から利用してきた冬営地周辺に村落を建設したのであった [秋山 2011: 43]。

以上の考察により、ロシア統治の下で、バートゥル、すなわち軍事指導者としての実質的な役割を骨抜きにされたマナプたちが、その内実を確実に変容させていったことが明らかとなった。

しかしながらここで、こうした実質上の変容とは裏腹に、マナプたちがロシア統治下でもなおバートゥルとしてのアイデンティティを保持し続けていたということも指摘せねばならない。そのことについて、「クルグズについて」はいくつかの点について言及している。それによれば、「現在〔20世紀初頭〕でも、マナプたちに話しかける際には『バートゥル』と言う」[Sh.V. 1911: 104]。また、マナプの没後に実施された「アシ (ash)」と呼ばれる追善供養の儀式につ

いての記述の中で、「歌い手たちと笛吹きたちは、アシを開催するマナブを讃えて『先祖から与えられた民をこのように統べ……あれを成し、これを成した……バートウル』と謡う」[Sh.V. 1911: 103]と記している。さらに、

マナブたちは自らが家畜を飼育し、種を蒔くことは恥である〔と考えている〕。勇者(yigitlik)とは見なされない。人から〔家畜を〕奪って屠ることが名誉であり、バートウルらしい(batirliq)ことであると言う[Sh.V. 1911: 103]。

と指摘している。ここからは、マナブたちの間では、20世紀初頭という時代に至ってもなお、バルムタによる家畜の略奪をバートウルに相応しいものとみなす価値意識が存在していたことが窺われる。

果たして、シャブダンがバートウルの称号を放棄するどころか、むしろそれを強調していた。その証左として注目になるのが、『シャブダンの叙事詩(Shabdan Jomagi)』である。この作品は、1860年代初頭にシャブダン率いるイギットがカルマクに対して行なったバルムタを題材として、シャブダンとイギットたちの勇敢さを賞賛する武勇伝である[Chagataev 1909-1910]。この叙事詩の成立背景については不明瞭な部分が多いものの、シャブダンの依頼を受けたムーサー・チャガタエフ Musa Chagataev というクルグズが、1909年から1910年にかけて作成したことが知られている。

中央ユーラシアにおいて、叙事詩が王権や支配層の権威を正当化する役割を果たしてきたことを踏まえれば[坂井 2012: 166-171]、この叙事詩の作成が、かつてのバルムタを題材にした叙事詩を作成することで、自身の勇敢なバートウルとしての資質をクルグズ社会に対してアピールしようとする意図のもとに行われたことは間違いない。そして、このようにシャブダンがバートウルとしての側面を強調した背景として、20世紀初頭のクルグズ社会においてバートウルという称号が依然として意味をもつものであったということに留意しておく必要がある。

以上、本章の考察から、「戦の時代」において、クルグズの首領に求められ

る条件はまず第一に勇敢さであり、それが「バートゥル」という称号によって象徴されていたこと、またロシア統治下では、首領の持つ戦闘性は薄められたものの、それでもなお「バートゥル」という称号が、クルグズ社会において意義あるものとみなされていたことが明らかとなった。その中で、シャブダンが終生バートゥルとしての称号を有していたことが注目される。すなわち、ロシア帝国とクルグズ社会とを結ぶ特別な仲介者としての彼の存在は、ただロシア帝国の「陸軍中佐」という称号によってだけではなく、中央ユーラシアの遊牧英雄たる「バートゥル」という称号によっても権威付けられていたのである。

とはいえ、植民地官吏のルミャンツェフが、「マナプは現在に至るまでカラ・キルギズ [=クルグズ] のもとに存在している。しかし彼らは […] 影響力も尊敬も有していない。その富と影響力の源泉だった略奪と襲撃は伝承の領域へと過ぎ去ったのだ」と指摘したように [Materialy... 1916: 14], 「バートゥル」としての権威が盤石なものであったとは決して言えないだろう。このことを踏まえ、次章において、シャブダンの権威をイスラーム世界との関係において検討しよう。

2 イスラーム世界の中のシャブダン

(1) 「戦の時代」のイスラーム

クルグズがイスラームを受容したのは16世紀とされる。以後、彼らのイスラーム信仰は、土俗性や呪術性を色濃く残しながら実践されてきたことが先行研究によって指摘されている [小松 1986: 12; 澤田 1995]。このことについては、19世紀中期にクルグズ社会を訪れた、カザフ出身のロシア軍将校であり、民族学者でもあったワリハノフ Ch.Ch.Valikhanov (1835-1865) も証言を残している。ワリハノフによれば、クルグズは、「教義や儀式を知らずとも己をムスリムであると言う。あらゆる儀式や迷信はシャーマニズムの色調を色濃く保っている。 […] 信仰の基本原理を理解し、読み書きのできる者はおろか、一日5回の礼拝や断食を行なう者すらいらない」 [Valikhanov 1985: 72] という。

当然のことながら、クルグズ社会におけるこうしたイスラーム信仰のありか

たは、「戦の時代」のマナブ、すなわちパートゥルたちにも影響を及ぼしていた。以下に、ワリハノフ自身がその場に居合わせて見聞きしたという逸話を紹介しよう。曰く、カザフのビーたちがクルグズのマナブたちに、「あなた方の預言者 (*prorok*) は誰か?」と尋ねたところ、マナブたちは、「もちろんパイガンバル (*paygambar*, 「預言者」を意味し、通常ムハンマドを指す) だ」と答えた。カザフ人のビーたちが重ねて、「では、預言者の名前は?」と聞き返したところ、マナブたちは「ひどく考え込んだ挙げ句、答えることができなかった」という [Valikhanov 1985: 72-73]。ワリハノフのこの証言は、当時マナブたちがムスリムを自称しつつも、実際にはイスラームに対してきわめて無知な状態にあった、ということを実に示すものであると言える。それでは、先行研究で指摘されている土俗性や呪術性といった点に関してはどうだったのであろうか。実のところ、この当時のマナブたちには、確かに土俗性やシャーマニズム的な要素を有していた形跡が見受けられる。例えば、サルバグシ族のマナブにしてパートゥルのウムトアリー *Ümōtaalī Ormon uulu* (1810-1879) については、戦争捕虜を殺して生き血を吸い、儀礼の際には人間を生け贄にしたと伝えられている [Abramzon 1932: 86]。彼はまた、シャーマニズムの祭司である「バフシ (*bakhshi*)」の異名を持ち、そのことを誇りにしていたという [Valikhanov 1985: 73]。こうしたシャーマニズムとのつながりは、シャブダンの父親であり、マナブにしてパートゥルのジャンタイ・カラベク *Jantay Karabek uulu* (?-1867) にも見出すことができる。一例を挙げると、1869年に東洋学者ラドロフ V.V. Radlov が採集したジャンタイへの挽歌 (*koshok*) には以下のような箇所がある。

ジャンタイが生きていた時には／同胞を山のように守った／敵を黒羊のように絞め殺させた／渡らずに川を波立たせた (*kechpei suuni tolkutkan*) ／逃げずに敵を威嚇した [Radlov 1885: 592]。

遊牧社会には、広く「ジャダ」⁽⁴⁾と呼ばれる呪術が存在していたことが知ら

(4) ジャダについては、羽田 [1982: 405-413] を参照。

れているが、右に挙げた史料中の、「渡らずに川を波立たせた」という一節はそのような呪術を彷彿とさせる。ジャンタイが実際にこうした呪術をおこなっていたかどうかはともかくとして、以上のことから、「戦の時代」のマナブ＝バートゥルたちとシャーマニズムの間には、密接な関係が存在しており、またそのことが広く認知されていたことは確かであると言えよう。

他方、こうしたシャーマニズム的な色彩を色濃く残しつつも、クルグズ遊牧社会におけるイスラーム化は確実に進展していった。その度合いは、とくにコーカンド・ハン国と密接な関係にあったフェルガナ盆地周辺のクルグズにおいてより高く〔小松 1986: 12〕、天山山脈北部のセミレチエにもその波は及んでいた。シャブダンも、同地域のクルグズにおけるイスラーム化の潮流を象徴する人物でもあった。前章において考察したように、彼は遊牧的な英雄「バートゥル」としての権威を生涯にわたって保持し、またそれを強調しつつきた。その一方で、シャブダンの場合は、先に示したような無知で「異教的なムスリム」であったマナブたちとは異なり、敬虔で、ある意味「正しいムスリム」としての側面をも有していた、少なくともそうあらうとしていたことを指摘したい。実際、1920年代初頭にアブラムゾンが実施した調査からは、シャブダンが儀礼を厳格に遂行していた姿が浮かび上がる。アブラムゾンによれば、シャブダンは毎日夜明け前に起床して沐浴し、礼拝（ナマズ）を行った。また、ある時、シャブダンがトクマクのモスクで祈祷していた最中に大きな地震が起こった。この時モスクにいた人々は皆、すぐさま外に避難したが、シャブダンはただ一人モスクに残り、祈祷を最後までやり遂げたと伝えられる〔Abramzon 1932: 91〕。

シャブダンをめぐるこうした逸話の存在は、裏返せば生前、シャブダンが敬虔なムスリムとしてのイメージをクルグズ社会にアピールしていたことを示唆している。つまり、クルグズ社会におけるシャブダンの権威は、前章で検討した「バートゥル」としてのそれのみならず、イスラームとも密接に関係していたと考えられるのである。この点を念頭に置きつつ、以下では、シャブダンとイスラームとの関わりについて検討したい。



図1 シャブダンのモスク（クルグズ共和国映像音響写真資料館蔵）

(2) イスラームによる権威付け

シャブダンはいつ、何を契機としてイスラームに傾倒するようになったのか。このことについては、史料上の制約もあり定かではない。ただし、著者が確認できた限りでは、1897年に、ピシュペク郡長タルイジン A.Talyzin がセミレチエ州軍務知事に宛てて報告書を送っており、その中でシャブダンに関して、「イシャーンやホジャへの崇敬を高めつつあり、[…] 彼らのために民衆から莫大な数の家畜を集めている」と述べている [TsGA RK.f.44.op.1.d.695.1.5ob.]⁽⁵⁾。このことから、遅くとも19世紀末頃にはすでに、シャブダンがイスラームに積極的な関心を寄せていた様子が窺える。

さらに、他史料からは、この時期以降に、彼がムスリムとしての活動を盛ん

(5) ここで述べられているイシャーンやホジャに関して、彼らは何者であり、どのような活動を行っていたかといった詳細は明らかではない。小松久男は、アンデイジャン蜂起の首謀者であるイシャーン・マダリーの影響力が、セミレチエのクルグズにまで及んでいたことを指摘しており [小松 1986: 12]、当該地域におけるスーフィたちの活動は、クルグズ社会におけるイスラームの実相を明らかにする上で重要な課題であるが、その具体的な検討は他稿に譲りたい。

に行うようになった様子が散見される。例えばシャブダンは、1900年にサルバグシ郷におけるモスクの建設をセミレチエ州当局に願い出て、その建築を実現させた〔TsGA RK.f.44.op.1.d.20752.1.99-99ob.〕〔図1〕。当時、セミレチエにおいて、遊牧民によるモスクの建設は、皆無ではないにしても、きわめてまれなことであった。

また、こうしたモスクの建設もさることながら、特筆すべきは、1904年12月から翌1905年5月にかけて、シャブダンがハッジ（マッカ、マディーナへの巡礼）を実行したことである。この時ハッジを行なったことにより、シャブダンは「ハーッジュ」と称する資格を得た。そしてこの「ハーッジュ」という称号は、彼にとって新たな権威の源となったのである。

このことを示す証左として注目に値するのが、彼の没後1912年に、故地大ケミン——現在のクルグズ共和国チュイ州東端にあたる——に建立された墓碑である。天然石でできた墓碑（縦約85cm、横約40cm、奥行き約15cm）の両面には、アラビア文字テュルク語による碑文が刻まれている。この碑文の冒頭には、シャブダンの父祖について以下のように刻まれている。

父祖たち カラベク

アタケ・パートウル その父はトゥナイ・パートウル

右からも明らかなように、碑文の中で、シャブダンの先祖には、「パートウル」の称号が付されている。その一方で、シャブダンについては、

ジャンタイの息子シャブダン・パートウル・ハーッジュ (bāṭīr ḥājī)

と記されていた。ここで、クルグズ社会で従来もちいられてきた「パートウル」という称号に、「ハーッジュ」というイスラーム的な称号が付加され、新たに「パートウル・ハーッジュ」という称号が作り出されていることに注目したい。もちろん、当時シャブダンは、単に「パートウル」と呼ばれることもあり——例えば、前章冒頭で引用した訃報記事——常にこの称号が用いられてい

たわけではない。ただし、オスマンアリーやサブル・ガブドゥルマーンの記述にも、「バートウル・ハーツジュ」という称号を見いだすことができる [‘Uthmān ‘Alī 1914: 62; ‘Abd al-Mannūf 1913 (No.4): 127]。また後年、いわゆる1916年叛乱の際、叛乱の先頭に立ったシャブダンの息子たちは、「バートウル・ハーツジュ」(=シャブダンを指す)の名の下に叛徒の集結を呼びかけていた [Vosstanie... 1960: 381] という。

これらのことは何を意味しているのだろうか。シャブダンを、単に「バートウル」ではなく、「バートウル・ハーツジュ」という称号で呼ぶようになったのは、むしろ、彼のイスラームの熱心な信奉者・実践者としての側面にも敬意を表すためであったのだろう。しかしさらに推測をすれば、このような称号が積極的にもちいられるようになった背景には、シャブダン本人、あるいはその周囲の人物たちの間で、「バートウル」という従来の遊牧的な首領の称号に、クルグズ社会においてにわかに重要性を帯びてきたイスラームの要素を付けくわえることで、その権威の強化を図ろうとする思惑があった、と考えることもできる。事実、他史料からは、イスラームと彼ら自身とを積極的に関連づけようとするクルグズたちの姿が浮かびあがってくる。

例えば、シャブダンはハッジに赴いた際、オスマン朝のスルタンにヒジャーズ鉄道建設費用として2,000ルーブリを寄付し、スルタンから金メダルを授与された。息子カマルの伝記によれば、シャブダンはわざわざセミレチエ州軍務知事に願い出て、ロシアから授与された他のメダルとともに、スルタンのメダルをカフタンに身につける許可を得たという [Kamal 1947: 23-24]。ここからは、メダルを誇示することによって、オスマン朝のスルタンを盟主とするスンナ派イスラーム世界の中にも自らを位置づけようとしていたシャブダンの様子が窺える。

また、この頃、イスラームによる権威付けという現象が、彼らの系譜の中にも見られるようになったことはきわめて興味深い。元来、クルグズたちは自らの部族の系譜を口頭伝承のかたちで伝えてきた。右に示す図2は、前述のワリハノフが1850年代に行なったクルグズの部族区分調査記録を元として、筆者が系図として復元したものである。

この系譜からは、クルグズたちが、「キルギズバイ (Kirgizbay)」という伝説上の人物を始祖とする系譜意識を有していたことが読みとれる。なお、マナプという称号は、**図2**にも示されているタガイという人物から派生した、オン・カナト (右翼) 諸部族の首領が帯びた称号であった。このオン・

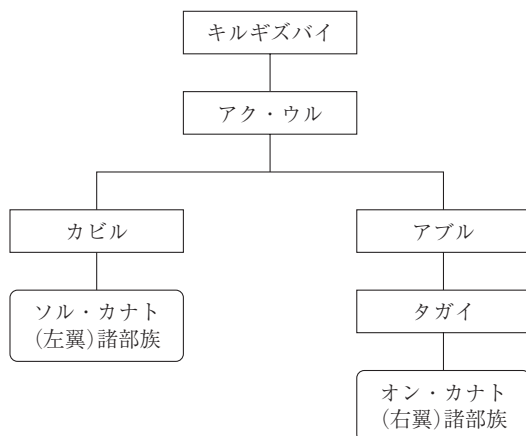


図2 クルグズの系図
(Valikhanov [1985: 40] を参考に筆者作成)

カナトの首領たちは、タガイの血統に連なる者であるという、いわば「タガイ裔」とでも呼ぶべき血統意識を20世紀初頭に至るまで有していた [Sokolov 1910: №54]。

ところが、20世紀初頭になると、このようなクルグズの部族系譜を、イスラームの系譜に接合しようとする傾向が確認できるようになる。このことについて、植民官吏ソコロフは、「特に規則性が認められるわけではないが、系図の形で現存する主要な部族区分と旧約聖書の系図——イサクの一族のアブラハム、ヤコブの一族のイサク等々といった具合に——を結びつけようとする志向が長老たちの間で顕著に認められた」と記している [Sokolov 1910: №54]。

こうした試みを、より系統的かつ大々的に行ない、系譜の出版を実現したのがオスマンアリーである。「序論」で紹介した彼の著作、『シャドマーンに捧げしクルグズの歴史』は、シャブダンの資金援助によって執筆された。次頁に挙げる**表**は、同書の多くの部分を占める系譜叙述を、筆者が整理したものである。

ここから、クルグズ諸部族 (③—a), ならびにタガイに連なるマナプたちの系譜 (③—b) が、イスラームの系譜 (①) とテュルク族 (②) の系譜の中に位置づけられていることがわかる。このように、クルグズの系譜をイスラームの系譜と直接的に結びつけようとする傾向は、先に述べた1850年代の系譜上

表 『シャドマーンに捧げしクルグズの歴史』における系譜叙述の構造

①	イスラーム の系譜	アダム, エヴァ→ノア→ヤベテ→テュルク→ […] → (②へ)
②	テュルク族 の系譜	オグズ・ハン→ […] →モグール→カラハン→クルグズ→サバル・ シャー→ […] →アルスタン・ハン→ジャンチョロ (→カザフ・中 ジューズ) /カラチョロ (→カザフ・小ジューズ) /バイチョロ (→カ ザフ・大ジューズ, <u>クルグズ</u>) → […] → (③へ)
③	(a) クルグズ諸 部族の系譜	ドロソ・ビー→クウル (中国, 天山のクルグズ諸部族: チョンバグ シ, ムンドゥズほか) →アククウル→ムングウシ (現在のアンディ ジャン・クルグズ) /アディゲネ/ <u>タガイ</u> →(b)へ
	(b) タガイ裔諸 部族の首領 (マナプ) の系譜	エセンクルの子たち, テミルの子たち, ドーロトの子たち, トゥナ イの子たち, サトゥプ・アルディの子たち, ドーロスの子たち, タ スタルの子たち, トコの子たち, モルイの子たち, チェチエイの子 たち, アビラの子たち, ブグの子たち, ソルトの子たち, プレクパ イの子たち, クトゥムベトの子たち, ボトシュの子たち, トルカン の子たち, コシヨイの子たち, ジャマンサルトの子たち, エシホジ ヤ, カナイ, チヌイ, ボシュコイ, バキ, バビシャン, タタの子た ち, チルパクの子たち, カラチョロ, アズイク, サヤク, チェルテ イケ

には見られなかったものであった。もちろん、同書はシャブダンが直接書いたものではなく、オスマンアリーが執筆したものであり、これのみを以てシャブダンの思惑をはかることは難しい。ただし、同書がシャブダンの資金援助を受けて刊行された、という事実を勘案すれば、程度の差はあれ、シャブダンもこうした系譜意識——部族系譜をイスラームの系譜に接合しようとする——を、持っていたと考えてもあながち間違いではないだろう。

以上、本章の考察から、19世紀末から20世紀初頭にかけて、シャブダンがモスクの建設やハッジの実行といったムスリムとしての積極的な活動を行っていたことが明らかになった。またその背後には、イスラーム世界の中に自らを位置づけることで権威付けをはかろうとする彼の思惑が存在していたものと思われる。先に述べた系譜の作成も、恐らくはそのような意図のもとに行われたものであろう。

こうしたシャブダンの一連の活動の背景には、ロシア統治の進展の中でクル

グズの首領たちの「パートゥル」としての実質的な側面が失われつつあったこと、さらに序論において指摘したように、19世紀末よりロシア当局が「対マナプ闘争」の方針を明確に打ち出したことによって、マナプの首領としての權威が低落傾向にあったことが考えられる。事実、セミレチエ州のある軍政官は、多くのマナプがハッジを行ないつつある状況について、そこに「マナプ制 (*manapstvo*) の崩壊」を重ね合わせている [TsGA RK.f.44.op.1.d.10253.1.42ob.]。シャブダン自身が、彼の置かれたこうした状況に対してどれだけ自覚的であったかということについては推測の域を出ない。ただし、客観的な状況を踏まえれば、彼がイスラーム世界とクルグズ社会とを結びつける媒介者となることで、クルグズ社会における首領としての新たな意味を獲得しようとしていたことは確かであろう。

結 論

19世紀末にピシュペク郡長としてクルグズの統治に当たったタリイジンは、セミレチエ州軍務知事に宛てた報告書の中で、シャブダンについて以下のように述べている。

シャブダン・ジャンタエフの影響力は、主にロシア政府に対する個人的な功績に基づくものです。[...] この地方がロシア権力に服属した際、彼はマナプによる支配が終焉を迎えること、したがって新たな状況において他から抜きん出るためには、他の誰よりも熱心にロシアに対して功績を立てなければならないことを理解したのです [TsGA RK.f.44.op.1.d.695.1.4]。

しかし、本稿の考察を踏まえるならば、シャブダンの權威の源泉をひとりロシア帝国との関係においてとらえるタリイジンの見解は、一面的に過ぎると言わざるをえない。何となれば、本稿をとおして明らかにしたように、シャブダンの權威は、中央ユーラシア遊牧世界、そしてイスラーム世界の中にも位置づけられていたからである。

シャブダンの権威は、まず第一に、中央ユーラシア遊牧世界に古くから存在する勇士、バートウルとしてのそれに根差すものであった。もちろん、シャブダンのバートウルとしての権威がそれ自体で自己完結していたものではなく、ロシア帝国の統治体制とも表裏一体の関係にあったことにも留意しておかなければならない。ただしシャブダンは、ロシア支配の下でバートウルとしての権威を放棄したのではなく、むしろ、ロシア統治の下でもなお、バートウルたんとする途を模索していたと捉えなおすことができよう。つまり、ロシア統治の下で、属地的原理に基づいた再編成が行われていたクルグズ社会には、それと併行する形で、こうしたバートウルとしての権威によって支えられた、属人的原理が確かに存続していたということが指摘できる。

さらにシャブダンは、こうしたバートウルとしての権威に加えて、イスラームによる権威付けをはかっていたことが明らかとなった。20世紀初頭に、シャブダンに対して新たに用いられるようになった「バートウル・ハーτζュ」という称号は、こうした動向を如実に示すものであった。先行研究で指摘されているように、当時、中央ユーラシアの政治権力にとって、イスラームが重要なファクターになりつつあったとするならば、シャブダンの事例は——クルグズ社会全体を代表するものではないにせよ——そうした動向をクルグズ史の文脈において確認する上での一証左となるだろう。

最後に、クルグズ首領層の権威に関する考察を進めてゆく中で浮上してきた諸課題について触れることで、本稿の結びとしたい。まず、本稿ではクルグズの中でも、とくに天山山脈西北部のセミレチエの一首領に焦点を当てて考察を行なったが、もちろんシャブダンの一事例によって、クルグズ社会の全体像を代弁させることはできない。本稿で明らかにしたシャブダンの事例を踏まえた上で、フェルガナ地方のクルグズについても同様の見地から比較検討する必要があるだろう。また、ロシア帝政期という枠を超えて、「バートウル」という権威が、ソ連時代、そして現代に至るまでクルグズ人の政治文化、社会編成、そして心性などにいかなる影響を与えてきたのかということについて検討する必要がある。さらには、クルグズという枠を超えて、カザフをはじめとする周辺の諸集団における「バートウル」の位置づけについても考察していきたい。

このように、「パートゥル」という、いわば汎中央ユーラシア的な現象について、地域性、民族性、時代性などに留意しつつ、多角的に明らかにしていくことを今後の課題の一つとしたい。

参 考 資 料

【未刊行史料】

Chagataev 1909-1910: Муса Чагатаев, “Шабдан жомагы” (Рукописный Фонд Национальной Академии Наук Кыргызской Республики. № 280).

Kamal 1947: Камал Шабданов, “Атабыз Шабдан баатыр тууралу жазылган тарих” (Рукописный Фонд Национальной Академии Наук Кыргызской Республики. № 158).

TsGA RK: Центральный Государственный Архив Республики Казахстан.

f.44 : Семиреченское областное правление.

【刊行史料】

‘Abd al-Mannuf 1913: Šābir ‘Abd al-Mannuf, “Tiyānshān ṭāwīning tīran chūqurlarindan,” *Shūrā*, No.2, 4.

Abramzon 1931: Абрамзон С.М., “Современное манапство в Киргизии”, *Советская этнография*. №3.

——— 1932: Абрамзон С.М., “Манапство и религия”, *Советская этнография*. №2.

Aristov 2001: Аристов Н., *Усуни и кырызы или кара-кыргызы: Очерки истории и быта населения западного Тянь-Шаня и исследования по его исторической географии*. Бишкек.

Gavrilov 1927: Гаврилов М.Ф., “Манап”, *Современный аул Средней Азии (Социально-экономический очерк)*. Вып. X. Загорная часть (Каракол-Нарынского Округа Киргизской АССР). Ташкент.

Martin 2001: Virginia Martin, *Law and Custom in the Steppe: The Kazakhs of the Middle Horde and Russian Colonialism in the Nineteenth Century*, Curzon.

Materialy... 1916: *Материалы по обследованию туземного и русского старожильческого хозяйства и землепользования в Семиреченской области, собранные и разработанные под руководством П. П. Румянцева*. Том VII, Пишпекский уезд. Киргизское хозяйство Выпуск 2. текст. Петроград.

Mestnye... 1912: “Местные известия”, *Семиреченские областные ведомости*. № 80.

Ömürbekov 2003: Өмүрбеков Т.Н., *Улуу инсандардын кыргызстандын тарыхындагы ролу жана орду (XIX кылымдын ортосу- XX кылымдын башы)*. Бишкек.

Ploskikh 1977: Плоских В.М. *Киргизы и кокандское ханство*. Фрунзе.

Prior 2002: Prior, Daniel G., “The Twilight Age of the Kirghiz Epic Tradition”, PhD diss.,

- Indiana University.
- Radlov 1885: Радлов В.В., *Образцы народной литературы северных тюркских племен*. Ч.V. Наречие дикокаменных киргизов. СПб.
- Semenov 1958: Семенов-Тянь-Шанский П.П., *Путешествие в Тянь-Шань*. М.
- Sh.V. 1911. “Qirgizlar ũğrūsında”, *Shura*, No.4.
- Shabdan... 1999: *Шабдан баатыр: эпоха и личность: Документы и материалы*. Бишкек.
- Shābdān... 1912: “Shābdān bāṭīr Jānṭāy ũghlīnīng opātī”, *Семиреченские областные ведомости*. № 80.
- Shkapskii 1907: Шкапский О., “Переселенцы и аграрный вопрос в Семиреченской области,” *Вопросы Колонизации*. №1.
- Sokolov 1910: Соколов А., “О кара-киргизах,” *Семиреченские областные ведомости*. №53–58.
- Soltanoev 1993: Белек Солтоноев, *Кызыл кыргыз тарыхы*. Бишкек.Т.2.
- Talıp Moldo 1993: Талып Молдо, “Кыргыз тарыхы, уруучулук курулушу түрлүү салттар”, *Кыргыздар*. Бишкек.
- ‘Uthmān ‘Alī 1914: ‘Uthmān ‘Alī Sīdīkov, *Ta’rīkh-i qirghiz-i shādmānīya*. Ufā.
- Valikhanov 1985: Валиханов Ч.Ч., “Записка о киргизах”, *Собрание сочинений в пяти томах*. Т.2.Алма-Ата.
- Vāyskāvōy... 1912: “Vāyskāvōy ştarshina Shābdān bāṭīr Jānṭāy ũghlī,” *Семиреченские областные ведомости*. № 96.
- Venyukov 1861: Венюков М. 1861. “Очерки Заилийского края и Причуйской страны”, *Записки Императорского Русского Географического Общества*. Кн.1.
- Vosstanie... 1960: *Восстание 1916 года в Средней Азии и Казахстане: сборник документов*. М.
- 秋山 徹 2009: 「20世紀初頭のクルグズ部族首領権力に関する一考察：シャブダン・ジャンタイの葬送儀式的分析をてがかりとして」『内陸アジア史研究』24号。
- 2010: 「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立：部族指導者「マナプ」の動向を手がかりとして」『史学雑誌』119編8号。
- 2011: 「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の展開：統治の仲介者としてのマナプの位置づけを中心に」『スラヴ研究』58号。
- 小沼孝博 2001: 「19世紀前半『西北辺疆』における清朝の領域とその収縮」『内陸アジア史研究』16号。
- 小松久男 1986: 「アンディジャン蜂起とイシャーン」『東洋史研究』44編4号。
- 2012: 「汎イスラーム主義再考——ロシアとイスラーム世界——」塩川伸明, 小松久男, 沼野充義(編)『ユーラシア世界3 記憶とユートピア』東京大学出版会。

- 坂井弘紀 2012:「英雄叙事詩の伝える記憶」塩川伸明, 小松久男, 沼野充義(編)『ユーラシア世界3 記憶とユートピア』東京大学出版会。
- 澤田 稔 1995:「16世紀後半のキルギズ族とイスラーム」『帝塚山学院短期大学研究年報』43号。
- 2005:「オアシスを支配した人びと:17世紀ヤルカンドの事例」松原正毅, 小長谷有紀, 楊海英(編)『ユーラシア草原からのメッセージ:遊牧研究の最新線』平凡社。
- 新免 康 2001:「新疆ムスリム反乱(1931~34)におけるクルグズ(1)」『中央大学アジア史研究』25号。
- 羽田 明 1982:『中央アジア史研究』臨川書店。
- 林 俊雄 2009:『遊牧国家の誕生』(世界史リブレット98)山川出版社。
- 堀川 徹 1999:「民族社会の形成」間野英二(編), 竺沙雅章(監修)『アジアの歴史と文化8:中央アジア史』同朋舎。
- 堀 直 1992:「中国と内陸アジア」間野英二ほか(編)『内陸アジア(地域からの世界史6)』朝日新聞社。
- 1995:「草原の道」歴史学研究会(編)『世界史とは何か:多元的世界の接触の転機(講座世界史1)』東京大学出版会。
- 松原正毅 1991:「遊牧社会における王権」松原正毅(編)『王権の位相』弘文堂。
- 村上正二 1993:『モンゴル帝国史研究』風間書房。
- 若松 寛(訳) 2001:『マナス 少年篇:キルギス英雄叙事詩(東洋文庫694)』平凡社。
- (訳) 2003:『マナス 青年篇:キルギス英雄叙事詩』(東洋文庫717)平凡社。
- (訳) 2005:『マナス 青年篇:キルギス英雄叙事詩』(東洋文庫740)平凡社。

【附記】本稿は平成24年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。なお, 第二章で扱った墓石の調査は, NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点公募研究「近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究」の一環として2012年夏に実施されたものである。調査に同行する貴重な機会を与えてくださった澤田稔先生にはこの場をかりて御礼申し上げたい。

ON THE AUTHORITY OF THE KYRGYZ CHIEFTAIN CLASS UNDER THE RUSSIAN RULE: BETWEEN THE NOMADIC AND ISLAMIC WORLDS

AKIYAMA Tetsu

This article uses the case of Shabdan Jantay uulu (1840-1912) to elucidate the authority of the Kyrgyz chieftain class under the Russian rule. Shabdan was a figure deeply linked to the establishment of the Russian rule in Kyrgyz society. He was counted as a high-ranking officer by the Russian Empire, and he played a special intermediary role in that rule. Based on these facts, this article considers the authority of Shabdan in terms of the overlap between Central Eurasian nomadic and Islamic worlds. The authority of Shabdan was rooted in the concept of *batyr*, meaning hero, that existed from ancient times in nomadic world of Central Eurasia. Prior to the Russian rule, the qualification most demanded of a Kyrgyz chieftain was courage and this was symbolized by the title *batyr*. As Kyrgyz nomadic society was incorporated into the Russian Empire, the bellicosity of the chieftain grew etiolated, but the title *batyr* was nevertheless considered significant in Kyrgyz society. Within this context, it is notable that Shabdan held the title of *batyr* to the end of his life. His existence as a special intermediate linking Kyrgyz society and the Russian Empire was not simply due to his military rank in the Russian Empire, his authority was also buttressed by the title *batyr*, a hero of Central Eurasian nomads. Moreover, from the end of the 19th century to the start of the 20th century, it has become clear that Shabdan devised a way to increase his authority through Islam in addition to the use of the title *batyr*. The title *bāṭīr ḥājī* that was newly employed by Shadan at the beginning of the 20th century can be said in fact to indicate this move. It can be surmised that as an intermediary linking the Islamic world and Kyrgyz nomadic society, Shabdan attempted to obtain a new significance as a chieftain in Kyrgyz society.